日本歯科医史学会会誌・第5巻
第4号通巻15号・昭和53年3月

和蘭字彙について*

島村昭辰** 上潟口 武***
稲井鉄鳴****

緒言

わが国におけるオランダ医学の本格的な研究は杉田玄白，前野良沢らに始まる．当時は蘭和辞書はなく，比較的乏しい蘭語知識をもとに彼らはKulmusの解剖学原書（Amsterdam, 1734）の翻訳にとりかかり，苦闘の末，“解体新書”（1774）を出版したことは有名である．わが国最初の蘭和辞書とされる稲村三伯らの“江戸ハルマ”（波留麻和解）の出版は解体新書の刊行から約20年経過した寛政8年（1796）であった．この辞書はFrancois Halmaの蘭仏辞書を底本として蘭和化したものである．その後，その流れを汲む“関西版”（1805～1806），縮刷版として“訳鍵（1810）が次々世に出た．一方，長崎においても，出島のオランダ商館長であったHendrik Doeffと訳官らによって，同じハルマの蘭仏辞書を底本としたヅーフ・ハルマ（長崎ハルマ，1811～1834）が作られた．この辞書は幕府に献上されただけで出版されなかったため，写本によってひろがり，多くの好学者に利用されたようである．それからさらに約20年たって，幕府の法眼の地位にあった桂川甫周によってヅーフ・ハルマの改訂版が出版された．これが和蘭字彙（1855～1858）である．福井県立大野高等学校には，ハルマ蘭仏辞書を始めとしてヅーフ・ハルマの写本，和蘭字彙，訳鍵など，当時の膨大な辞書が保存されているようであるが，著者らは，たまたま島根県津和野町の郷土資料館に重訂解体新書の銅版図，C.W. HufelandのEnchiridion Medicum（Amsterdam, 1838）その他とともに保存されている和蘭字彙の全巻を手にする機会が得られたので，その内容を紹介するとともに，序文とあとがきから邦訳の俗語使用の意図，本書出版の経緯，さらには収録されている歯科医学関係用語などについて述べて見たい．

成績

和蘭字彙は全部で17分冊からなり，総頁3,776（1,888丁，行数30）におよぶ．ちなみに，各分冊の記号と丁数を列挙すると次の表のようになる．

和蘭字彙の分冊記号とそれらの丁数

分冊記号	丁数	分冊記号	丁数
A	84.5	M	81.5
B	157.5	N	42.5
CD	76.0	O	217.0
EF	49.5	PQR	122.0
G	134.0	S	161.0
H	81.0	T	78.0
IJ	38.0	UV	221.0
K	125.0	WXYZ	142.5
L	77.0		

本辞書は木版刷で，扉の正面中央に和蘭字彙，右肩に安政乙卯新鐫，左側に侍醫法眼桂川甫周戚梓と版刷され，巻首と巻末に甫策（国幹）による例言と結語が漢文で左縦書きされている（写真1，2）．発行元は日本橋二丁目山城屋佐兵衛とある．

原語はもちろん筆記体の横書きである．名詞，形容詞，副詞，動詞などを区別する略号がそれぞれ付けられ，名詞については性の区別もある．こ

* On the Netherlandish-Japanese Dictionary “Oranda Jii (1855～1858)”

** Akitatsu Shimamura: Dept. of Oral-Histology, Kyushu Dental College. 九州歯科大学
*** Takeshi Kamigataguchi: Dept. of Oral-Microbiology, Fukuoka Dental College. 福岡歯科大学
**** Tetsumei Inai: Laboratory of History of Dentistry, Fukuoka Dental College. 福岡歯科大学

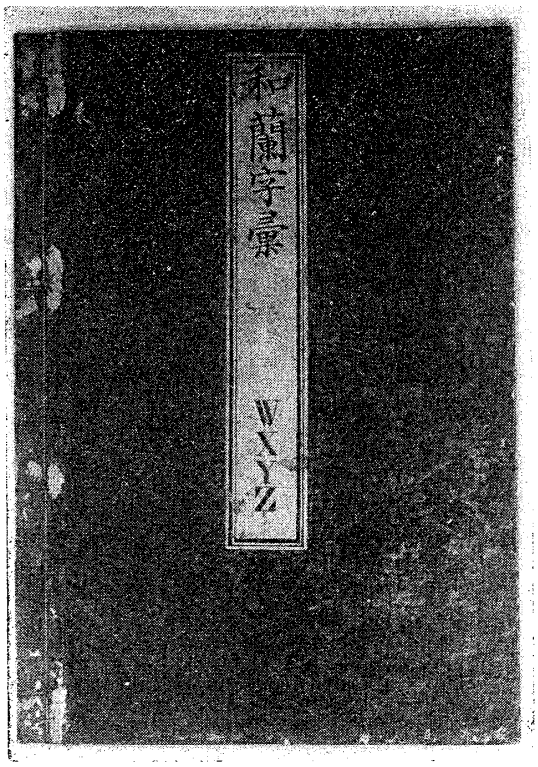

写真 1　WXYZ 分冊の表面

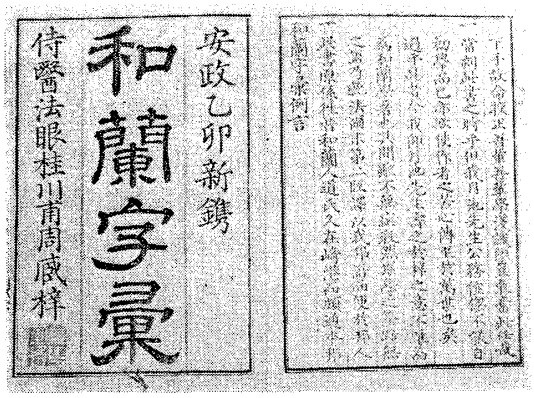

写真 2　A分冊の扉と例言の１枚目

れら単語のいたるところに，例句，例文をあげて勉学者に便宜を与えている．したがって，頁の行数は即単語数にならない．

邦訳語は原語に続けて横罫に縦書きにしてある．邦語は漢字と片仮名を使って楷書でかかれているので現代人でも読みやすい（写真３）．もちろん，例句，例文の訳もあるが，なかには原文の意味とことなる意訳や，付け足し的訳文も見られる．訳語，とくに形容詞，副詞，動詞の多くには俗語が使われているのが特徴である．

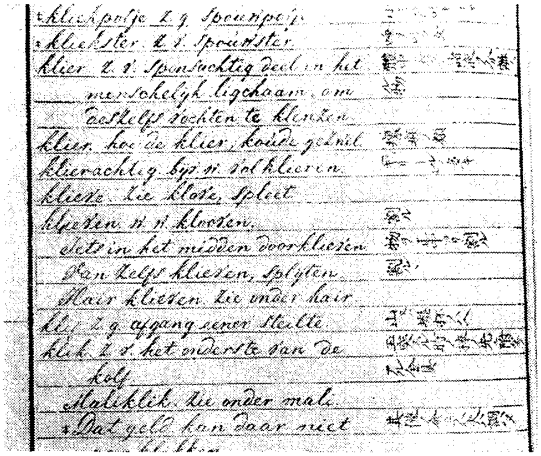

写真 3　辞書のK項の一部を示す

俗語使用の意図とその例：

俗語使用の意図を例言（序文）より抜粋してみると次のようにかかれている．

「此の書はもともと，昔オランダ人道氏(Doeff)久しく長崎に在りて，頗る本邦の語に通ず．乃ち，ハルマ第二版について訳するに，我が邦の語を以てして，邦人のオランダ学を為す者に便するものなり．……道氏曰く，凡そ字書を訳さんと欲せば，須らく質直の語を用うべし．何となれば則ち，その字書中，頗る鄙俚の語あり．若し，雅語を以て之を訳さんと欲せば唯に能く其の意を尽さずんばあらず．又，応に其の本意を失うべし．譬ば，猶崑崙児の浴となすごときは徒労にして，益なきなり．故に今，語の鄙俚を厭ざるは，一に原本の訳に因る．」

原本であるヅーフ・ハルマの序文にも，前記の口上に該当する箇所が見られるようである．ちなみに，古賀氏の長崎洋学史（1973）から引用してみると，

「夫辞書は初学の翫ぶものにはあらず，成学の人彼の言辞中に於て其義を研究するに用ゆるものなり．此故に辞書を訳するには必ず，質直の語を以てすることを要す．如何となれば辞書の中には殊に鄙俗なる辞多し．是を都雅なる語にて訳せんとせば極めて意を尽すことあたはざるのみか棄物となるべし．」

以上のことから，本辞書も原本であるヅーフ・ハルマの意図に忠実に従って俗語訳をしたわけであるが，改訂に当っては俗語の一部も改めた旨，

述べられている．つまり，原本では長崎の方言を多く使っているため，しばしば理解出来ないものがあることによる．しかし，その全部を改め直すことは出来なかったとしている．

次に主な俗語を参考までに掲載する．理解しがたい俗語には説明がなされている（いづれも，原文のまま）．

B項（本辞書のアルファベット分冊記号）

◦モモグル，歯ナキ人ノモノ喰フロツキ．

◦ドマグレテ居ル；ドジレテヲル．

◦黒ククスボラカス，煙ニテ．

◦眼ノトロイ．

G項

◦コケノ皮ニナル．赤貧ニナルヲイフ．

K項

◦アッチャア，是ハ長崎の方言ナリ（彼国ニテハ小兒ニ戯ルル時，己ガ面ヲ覆ヒ忽ニ亦面出シテ「キーケブー（kiekebae）」ト云フナリ．

L項

◦マギル，船ガ「レイン」河ヲマギリ登ル．

◦ツマエズニアル．

P項

◦カナギツタル，音声ヲ哑シテ緩ナラザルヲイフ．

◦ヒッカクル，酒ヲ一杯ヒッカクル．

S項

◦ヌラック，彼ハ身仕舞ヲスルニ甚ダヌラツク．

◦スガメ，斜視．

◦フラルル，夫婦ノ縁組セント云ヒカクルニ女ヨリイヤト云ヒ離サルルヲ云フ．

◦私窠子（ヨダカ），彼女ハ私窠子ノ様ニ見エ居ル．

◦スンガリトシテ居ル，彼女ノ姿ガスンガリトシテ居ル．

◦アラケカタ，整ヘ方，其事ノアラケカタハ吾気ニ叶ツテ居ル．

◦トバシリ．

◦神経ノ無キ話，タワイモナイ話．

◦脛ヲ衝キアツル，崎陽の方言，鼻ヲツクト云フ意．

以上の俗語のなかで，長崎（崎陽）の方言と断ってあるのは2カ所ある．したがって，他の言葉は長崎以外の地方語と思われる．俗語使用の意義は理解出来るとしても，説明をつけねば分らないような方言を強いて使われているのは訳者の出身地の言葉のためであろうか．当時の長崎は，政治的には幕府の直轄地であり，経済的には糸割符商人などによる関西方面の影響を強くうけていた．また，徳川時代の長崎警備は，肥後，島原，天草，大村，五島，平戸，唐津，鍋島，久留米，柳川，黒田，小倉，中津，長州，松山，薩摩など17藩の多くが関与していたので，各地の方言が混在していたとされている．したがって，長崎純粋の方言のとり入れられ方は案外少なく，むしろ西日本各地の言葉の混交したものが多いと思われる．詳しくは専門家の調査に委ねばならない．

本書出版の経緯：

桂川甫周（国興，月池）が原本の改訂版の刊行を企画するようになったきっかけは，原本が写本としてひろく伝藩する中に誤写が多くなったことによる．しかし，法眼としての甫周は公務多忙のため，その任にあたることが出来ず，次弟の甫策（国幹）に校正を命じ，さらに末弟の橘堂（国謙）にも専従させた．橘堂は途中，講武局の教授として転出したため，家中の門弟たちの加勢により成し遂げることが出来た．完成には，3年の歳月を要したようである．

歯科医学関係用語：

本辞書の全巻を網羅してみると，この中に歯科および医学に関連する用語が僅かであるが100語近く収録されている．全般的にみると，口腔を除く医学解剖系用語の訳は，ほとんど解体新書に使用されているもので，現代解剖学用語とあまり変らない．極く一部の解剖学用語や病名に対する訳が，当時の医学的知識を反映して大変面白く説明されている．一方，歯科関係の用語については，従来からの漢方医学または世俗的用語のあてはめが多く，新語の造成などは全く見当らない．それだけ，歯学への関心が一般医学に比べて，ほとんどなかったことを意味する．関与する口中医関係者がいなかったことにもよるであろうが歯学だけ

原　　語	邦　　訳	現代の用語
Tand; Tanden	歯	
Voortand	向　　歯	前　　歯
Gebit	歯	歯　　列
Hoektand; Oogtand	糸　切　歯	犬歯（糸切り歯）
Kiezen; Meer-, Maaltanden	齟　　歯	臼　　歯
Tandvleesch	齦	歯　　肉
Spog; Speeksel	唾	唾　　液
Kake been	頤　　骨	（上）顎　骨
Bakhuis	頬，パンノ焼キ所	頬部口腔前庭？
Mond	口	
Tong	舌	
Holletand	窪リタル歯	ウ　蝕　歯
Kevels; Tandvleesch zander tanden	歯ノナキ齦	無　歯　顎？
Knas tanden	歯切リスル	軋　　歯
Verrot tandvleesch	腐レタル齦	歯槽膿漏？
Tandtrekker	歯ヲ抜ク医者	歯　科　医
Tandinstrument	歯ヲ抜ク具	抜歯器具
Trektang om de tanden	歯ヲ抜ク鋏	抜歯鉗子
Tandpoeder	歯　磨　キ	歯　磨　粉
Amandel; Amandelen in de keel, Keelklier	巴　旦　杏 舌根ノ両方ニアル「キリール」	扁　　桃 口蓋扁桃
Kanker; Zekere quaal des ligchaam	「キリール」ノ腫レニシテ漸々ト大キクナリテ悪病ニ成リタルモノ	癌
De kanker in den mond hebben	口中ニ「カンケル」病ヲ受ケテ居ル	
Klier; Sponsachtig deel in het menschelijk	体中ニ有テ諸液ヲ分離スル物	腺
Waterkanker	齦　ノ　病	水　　癌

が捨て置きされた感を深くする．先づ歯科関係用語を現代語と対比させながら取りあげてみると上の表のようになる．

上記の訳語の一部について，解体新書，Kulmus の原書その他の書の用語と対比させながら考察してみたい．

◦向歯：voortand を素直に訳すと前歯となる．当時は一般的に向歯（奴可娑，牟加歯．乃倍婆，牟加不婆）または後述の抜歯として通用していたことからの翻訳と解する．杉田玄白らの訳した Kulmus の原書では，前歯に相当するところに Dentes incisores, Snytanden とある．つまり，オランダ語の前に学名のラテン語がかかれている．彼らは，これを板歯と訳した．オランダ語の Sny または Snij は“切りくだく”“解体”という意味であるから，彼らは機能上よりも古くからある“形態”上からの板歯に翻訳したものであろう．

◦糸切り歯：Hoektand の翻訳で，現在でも一般的に通ずる言葉である．Oogtand は現代的に直訳すると眼歯となる．Kulmus の原書では Dentes canini, Hond-of Oogtand とあって，玄白らは犬牙，眼牙とも名づけられると訳している．眼牙の方の由来は不明であるが，日本には古くからもなかった言葉ではないかと思われる．犬歯は歯群のなかでも形態上，機能上からも目玉的存在であることからの名称であらうか．

◦齟歯：いわゆる臼型をした奥歯（宇須波）を指すが，現代の臼歯名の原型とみなされる．解体新書（原書：Dentes molares, Bak-of Maaltanden）では，上下合わせて16本あるとし，第三大臼歯だけは区別している．第三大臼歯については（Dentes sapientiae, Wysheidstanden），“真牙”と訳されて，上下合わせて4本，その形は齟歯と同じとしている．Wys または Wijs は賢いという意味

であるから，もちろん現代の智（知）歯（wisdom tooth）を現わす言葉である．真牙（最後方に生える歯）という古い言葉があることからの翻訳といえる．

◦齦：現代でも歯肉の別名として歯齦が使われている．

◦頤骨：Kake はラテン語の Maxilla に相当するので上顎または顎骨を意味する．正確には Boven kake（下顎 Onder kake）となる．

◦頰：Bakhuis はパン屋であるが，頰とも訳されている．奥の腔所をさすものであれば，頰部の口腔前庭に相当するものと思われる．

◦窪リタル歯：Holletand は英語の carious tooth に該当する．古くから齲歯（ムシ歯またはムシクイ歯）という言葉があるのに翻訳されずに現代風に直訳をなしたようである．

◦歯ノナキ齦；腐レタル齦：それぞれに相当すると思われる現代の無歯顎，歯槽膿漏をあてはめてみたが，果して適切なものかどうか分らない．

◦巴旦杏：解体新書では Amandel アマンデルを巴旦杏核機里爾と直訳されている．安政4年(1857)，長崎に渡来した Pompe（ポンペ，朋百）の解剖学講義の記録では巴旦杏腺とかかれているようである．これはいづれも，口蓋扁桃だけを指す．扁桃という新語は，多分明治に入ってから他の扁桃，つまり舌扁桃，咽頭扁桃などと区別する際に造成されたものと思われる．Amandel in de keel; Keelklier を舌根ノ両方ニアル「キリール」と意訳されているのは全く適切な訳といえる．

◦カンケル：体の悪病という原語説明があるだけで，上述の邦訳に相当する原語文はついていない．恐らく，他の参考書または当時のオランダ医官から聞いた知識を補足したものに相違ない．それにしても，癌という立派な日本語がありながらそれを翻訳しないで，Kanker の成り立ちを説明している点が理解できない．癌とカンケルは異種のものと考えていたのであろうか．癌の本質を一般的に分り易く説明するためのものであれば，一応癌という字を付してもよさそうにあるが．

◦キリール：原語の説明は“体中にある海綿状物”という程度の意味であるから，訳の説明はカンケルと同じく，他から得られた知識を補足したものであろう．玄白らの解体約図（1773）では，これまでの漢方医学になかった新しい言葉であったため“幾里兒”と直訳され，解体新書では“機里爾”と修正された．医範提綱(宇田川玄真，1805)には，現代と同じ“腺”が，重訂解体新書（大槻玄沢，1826）には“濾胞”という言葉が造成されているのに，本辞書にはその新語を取り入れられていない．まだ，一般的に普及していないための

原　　語	邦　　訳	現代の用語
Pijnappel klier	頭脳中ニアル松毬形ノキリール	松　果　体
Oogmester; Oogarts	眼　　科	眼　科　医
Mannelijkheid	陰茎（彼ノ陰茎ニ石ガツマッタ）	（尿道結石）
Melt	脾　　臓	脾，脾　臓
Pis leuer	腎ヨリ膀胱ニ尿ヲ輸ル管	（輸）尿　管
Vergrootglas	顕　微　鏡	拡　大　鏡
Leverader	青　　脈	肝　静　脈
Ader	脈　　管	静　　脈
Heelmester	外　　科	外　科　医
Podagra	病名不詳	足　痛　風
Roode loop	赤　　痢	丹　　毒
Roos	病名不詳	丹　　毒
Spaansch pokken	黴　　瘡	天　然　痘
Krop been;	胸　　骨	?
Krop gezwel on der aam de kin	腮ノ下ニ発ル腫物ノ名	甲状腺腫

説明であろうか.

次に，一般医学関係用語をとりあげる．先づ，現代語と異なるもの，また面白い説明その他が付されているものだけを列挙すると前の表ようになる.

臓の脾の古い字は脾とある．解体新書でも，この脾が使われている．本辞書に見られる脾が果してより古い別字であるのか今のところ判じ難い．顕微鏡の微という字も古い字で，解体新書では“以顕微鏡視髪”とある．Vergrootglas のところには，“顕微鏡で虱を見る”(Eene luis daar een vergrootglas zien) という面白い例文がついている．天然痘は Pokken だけでよいのであるが，スペイン (Spaansch) という国名がつくところを見ると，当時のヨーロッパでの発病地または大流行地を現わすものかも知れない．胸骨は Borstbeen であるので，甲状軟骨を現わすための誤りであろうか.

上述以外の臓器名を現わす医学用語は30語ほどあるが，いづれも現代用語と変らない．ただ，内臓関係で見当らないものに膵臓 Groote klier がある.

次に，収録されている病名関係用語を参考までに掲げることにする（いづれも原文のまま).

痳病 (Druiper)，癩病 (Lazerij)，癩病院 (Lazarus huis，壊血病 (Scheurbuik)，腸′痛 (Kolijk)，麻痺 (Lemte; Lamheid)，癲癇 (Rallende ziekte)，痔痛 (Speenen ambeijen)，伝染病 (Bemettelijke ziekten)，膿腫 (Ettergezwel)，瘍 (Vallende ziekte; Zweer).

津和野と蘭学：

安政年間の津和野藩校“養老館”と同藩の吉木蘭斉家塾における蘭学教育は，有名な緒方洪庵塾と類似した方法をとっていたようである．佐野氏 (1973) によると，初め西学入門（吉木蘭斉著）を用い，和蘭文典・前後編（箕作元甫校，ガラマンチカ・セインタキスと呼ばれた）を経て，和蘭字彙をもとに蘭書を会読する方法であったという．洪庵塾での辞書はヅーマ・ハルマであったことは福沢諭吉の自伝，その他で知られている．蘭斉と洪庵はいづれも蘭学者坪井信道(1795～1848)の門下であるから，似た教育方法をとるのは当然であろう.

著者らが手にした和蘭字彙は，ほとんどいたみがなく美本であった．したがって，この本自体の使われ方は少なく，むしろ保存用のものではなかったかと思われる.

む す び

著者らは，島根県津和野町に保存されている安政年間出版の蘭和辞書“和蘭字彙”の紹介をかねて，本書出版の経緯と俗語訳の意図を本書の序文と結語を通して明らかにするとともに，収録されている主な俗語例と歯科医学関係用語をとりあげて文献的考察を試みた.

（本書を拝見する便宜を与えてくれた津和野町教育委員会，森澄泰文氏に心から感謝を申し上げます）

主な参照文献

1) Kulmus, J.A.: Ontleed kundige Tafelen (Gerardus Dicten), Janssoons van Waesbergb, Amsterdam, 1734.
2) 藤野恒三郎：日本近代医学の歩み．講談社，東京，1974.
3) 古賀十二郎：長崎洋学史上巻．長崎文献社，長崎，1973.
4) 松浦直治：長崎方言ばってん帳．長崎新聞社，長崎，1974.
5) 本山桂川：長崎方言集．図書刊行会，東京，1976.
6) 小川鼎三監修・大鳥蘭三郎校註：解体新書解説・解体新書（覆刻版）．講談社，東京，1965.
7) 山田平太：明治前日本口歯科史；明治前日本医学史．第4巻，日本学士院編，丸善，東京，(1964)，437～513頁.
8) 中西　啓：医学の伝来と長崎一神経病，精神病学の発達を中心に一．第65回　日本精神神経学会，長崎，1968.
9) 小川鼎三：明治前日本解剖学史；明治前日本医学史．第1巻，日本学士院編，丸善，1955.
10) 佐野正己：国学と蘭学．雄山閣，東京，1973.
11) 福沢諭吉：福翁自伝．金園社，東京，1977.